

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本におけるシャルル＝ルイ・フィリップの受容に関する一考察
Author(s)	東海, 麻衣子
Citation	フランス文学 , 32 : 65 - 74
Issue Date	2019-06-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048130
Right	
Relation	



日本におけるシャルル＝ルイ・フィリップの受容に関する一考察

東海 麻衣子

はじめに

1922年12月2日、「フィリップ記念講演会」が神田の明治会館にて举行された。この会を企画したのは、4年間のフランス留学を終えて帰国し、早稲田大学に仏文科を創設した吉江喬松、そして、10年間パリで波乱に満ちた青年時代を送り、帰国後『種蒔く人』を創刊した小牧近江といったフィリップ紹介の立役者たちだった。壇上には、1921年に駐日大使として赴任してきたポール・クロードルも立った。この時のことを山内義雄は、次のように回想している。

これは日本におけるフィリップ紹介の第一声だったが、クロードルは喜んで出席を承諾し、その席上「(…) かのバルザックからゴンクール兄弟、フロベールからゾラに至るまで、民衆を取り扱ったフランスの小説は、すべてこれ、貧しく虐げられた人々にたいして愛もなく、同情をも持たぬ気むずかしいそして猜疑心に充ちたブルジョワによって書かれたものである」といって、ここにフランスにはじめて生まれた民衆のための作家フィリップを推讃し、「かつてアンドレ・ジードとも語りあったことだが、われわれ文学者は民衆のために書かなければならない。しかし、ここに言う民衆のためというものは民衆を当てとして意味ではない。それは民衆それ自身に代わっての意味にはほかならない。作家はつねに自分が民衆を代表するものであり、自らの下に、あの暗澹たる民衆が、労働し、苦しみ、忍従することによって支払ってくれるこの光明と自由とはつねにこれをすべての者の利益のためにのみ受用すべきことを忘れてはならないと思う」という示唆多い言葉を述べたのだった¹⁾。(原文ママ)

1923年6月には、堀口大学訳による「シャルル・ルイ・フィリップの小品」(「娘の嫉妬」「獅子狩」「二人の正直者」「酔漢」)が、第二次『明星』に掲載される。この当代随一の「フランスかぶれ」²⁾の雑誌に掲載されたことによって、フィリップの存在がインテリ層に知れ渡っていったらうことは想像に難くない。これを皮切りに、フィリップの作品は次々と訳され、出版されていく。

1929年には、新潮社から全3巻の『フィリップ全集』が出され、フィリップの出版作品はすべて日本語で読める状態となった。この全集の月報には、翻訳者である吉江喬松、小牧近江、豊島興志雄、山内義男、堀口大学といった翻訳者たちのほか、佐藤春夫や林房雄ら文学者たちの文章も寄せられており、それぞれにフィリップへの篤い親愛の情を吐露している。

鈴木三重吉が、『赤い鳥』にフィリップの短編を再話というかたちで掲載しはじめたのもこの頃である。後述するように、『赤い鳥』掲載の影響は、フィリップ受容の新たな可能性を生み出す契機となるだろう。

こうした状況は、戦後も続く。1947年には、淀野隆三訳で『小さな町にて』が、1952年には、白水社からやはり全3巻の『フィリップ全集』が出版される。また同年、『ビュビュ・ド・モンバルナス』が、井上勇訳で角川文庫から、淀野隆三訳で岩波

文庫からと、2冊も出版されている。

しかし、60年代になると状況は一変する。新訳はなくなり、フィリップという名は、アンソロジーの中に見え隠れするだけになっていく。こうして、あんなにも愛読されたフィリップは、知る人ぞ知る作家となっていくのである。

ではなぜ、フィリップは読まれなくなっていったのだろうか。

同じく短編作家として日本人に愛されたモーパッサンやドーデ、メリメといった名が、今でも一般常識として知られているのに対して、フィリップの影はあまりにも薄い。それはいかなる理由によるものだろうか。本稿では、その要因を探っていきたい。

1. 日本におけるフィリップ作品の受容の流れ

まず、文人たちの言及を通して、フィリップの受容の流れを、より詳しく見ていこう。前述したように、フィリップの作品として、最初に日本に紹介されたのは短編であった。それから3年後の1926年、満を持してフィリップの代表作『ビュビュ・ド・モンパルナス』（『ビュビュ・ド・モンパルナス』、井上勇訳、新潮社）が出版される。

パリに出てきたばかりの青年が、それとは知らず娼婦と関係を持ったことから、娼婦とヒモの世界に巻き込まれていく物語、『ビュビュ・ド・モンパルナス』。フィリップ自身の経験に基づくこの小説は、フランスのみならず各国で広く読まれた。

イギリス版の序文を書いたTS エリオットはその中で次のように評している。

フィリップはたしかに、我々があるのままの世界に対して感じるであろうどんなひとりよがりな自己満足をも妨げる。だが、彼はどんな主張も擁護しない。彼は慈悲深いと同時に冷静である。彼の本の中で、我々は作中の誰をも非難しない。「社会制度」さえも非難しない。そして、最も高潔な者でさえ、これを読めば、自分は考えたり、言葉を放ったり、行動したりする中で、ひどい罪を犯してきたのだとを感じるであろう³⁾。

フィリップは、自分が目のあたりにした現実を、未熟な登場人物たちの言動と共に、特にユーモラスに、時に悲劇的に描き出すのだが、読者は人間の愚かさ、罪深さを真っ向から受け止めずにはいられなくなる。この小説を読んで、まったくの他人事だととらえられる者は、そもそも文学を必要としない者であろう。

では、このような小説を、文人たちはどのように受け止めたのだろうか。

宮本百合子は1926年3月11日の日記で、こう述べている。

「ビュビュ・ドゥ・モンパルナス」、ベルトという淫売婦、モオリスという情夫——女喰い、ピエールという小役人。全く、フィリップはこのような題材を、モウパッサンでも、ゾラでも、ドストイェフスキーでもなく扱って居る。生活の力がどんなに強い不可抗なものか、生存の恐

ろしさ、かなしさ、人間のそういうものに対する生きものとしての従順さ。道徳的であって誰にも説教せず、肉慾を明るく美しく悲しく見るところ、よし。彼の温い平静なきどらない心は、独特だ⁴⁾。

宮本百合子の洞察力は、TS エリオットと同じく、フィリップの作家としての資質を見事に言い当てている。庶民という題材は同じでも、フィリップのまなざしと筆致は、他のどんな作家とも重ならない。

その「独特」な小説は、青年期にあった井上靖にも強烈な印象を残したようである。

私が小説らしい小説を読んで、大きい感銘を受けた最初のもは、シャルル＝ルイ・フィリップの『ビュビュ・ド・モンパルナス』である。(…)しかし、その後今日まで、私はこの作品を読み返していない。どのような作品であるか、いまの私には見当がつかない。おそらくいま読み返したら、その時ほどの感銘はないであろうし、あるいは全く無感動であるかもしれない。しかし、この作品は私にとって大切な作品なのである。後年スタンダールやフロベールを読んで、他のいかなる作品からも得ない強い感動を受けたが、それとこれとは全く違うのである。『赤と黒』や『マダム・ボヴァリー』からは、本当の文学作品というものがいかなるものであるか、そしてまたその作品をとおして、人間というものが、生きるということが、あるいはまた人間と人間との関係というものがいかなるものであるか、そうしたことを教えられたが、しかし、そのため私自身は少しも変わりはしなかったのである。文学に対する眼を開かされたが、しかし、私自身の生きる姿勢はそのために些かも変りはしなかった。フィリップの作品の場合はそれとちがって、一人の少年に、彼がその気になれば感じとれる人生がそこにあるということを知らせてくれたのである。そして私はそうした人生を持つ少年になったのである⁵⁾。

井上靖は、この小説から受けた鮮烈な印象を、度々エッセイに綴っている⁶⁾ ほか、小説『夏草冬濤』にも、自己を投影した主人公が友人から『ビュビュ・ド・モンパルナス』を紹介されるというシーンを描いている。

その後も、淀野隆三、山内義男、三好達治らの訳で、フィリップ作品は次々と出版されていった。1937年には、太宰治のエッセイにもフィリップが登場する。

かれ（フィリップ）こそ、厳肅なる半面の大文豪。世をのがれ、ひっそり暮らした風流隠士のたぐひではなかった。34歳で死したるかれには、大作家 50歳 60歳のあの傍若無人のマンネリズムの堆積が、無かったので、人は、彼の、ユーゴー、バルザックにも劣らぬ巨匠たる貴祿を見失ひ、或る勇猛果敢の日本の男は、かれをカナリヤとさへ呼んでいた⁷⁾。

訳者である淀野隆三から贈られた『小さき町にて』（岩波文庫、1935年）の感想で始まるその文中には、フィリップの『若き日の手紙』や、アンドレ・ジッドのフィリップ評『シャルル＝ルイ・フィリップ』からの引用も見られ、太宰がフィリップの熱心な読者であったことがうかがわれる。上記の引用には、日本におけるフィリップの受容に対する違和感が、彼一流の言い回しで仄めかされていて興味深い。

このように文人たちの言説を辿っていくと、当時、フィリップは、文学に興味のある者なら誰しも読んでいる小説家であったことが分かる。100年後には、もはや名前すら知られていない作家となってしまうことを、彼らの誰が予見し得たろうか。

本稿では、その要因を探るべく、フィリップ作品の日本での受容を考える際の重要な要素として、紹介者、翻訳者の思想や動向を指摘したい。まず「フィリップ紹介の第一声」を発した吉江喬松、小牧近江を中心とした翻訳者たち。次に『赤い鳥』にフィリップの短編を取り上げた鈴木三重吉。この二つの流れが、フィリップ作品をどのように紹介し、それによってどのような受容が生み出されていったのか。それについて考えることで、文学作品紹介の難しさ、そしておもしろさを浮き彫りにしていきたい。

2. 「貧」／吉江喬松、小牧近江

まず一つ目の流れだが、ここでのキーワードとして「貧」という言葉を挙げておこう。フィリップを紹介する際必ず用いられるこの字は、小さな町の木靴屋の息子という生い立ちに起因する。19世紀末当時、作家として暮らしていけるのはブルジョワの子息だけであり、職人の息子が作家になるなどということはありません。フィリップ自身、モーリス・バレスに宛てた手紙で次のように言っている。

私は、フランスにおいて貧しい出自から文学の世界に入った最初の者であろうと思います⁸⁾。

1881年、ジュール・フェリー法によって、教育の無償化が制定され、奨学制度もできたおかげで、上流階級の子息ではなかったフィリップも、優秀な生徒であるという正当な理由で高等教育を受けることができるようになった。当時も今も難関校であるエコール・ポリテクニークを目指し、中高と寄宿舎で勉学に励むが、多感な青年期に急速に文学にのめり込んでいったフィリップは、受験を断念。作家になる決心をし、パリに出る。当然、その決断に反対し、絶望する親からの援助など望むべくもない。バカロレアを取っても、何のつてもないことから職を得られず、無為徒食の状況に苦しんだ。それでもようやく、パリ市役所に仕事を見つけ、生涯公務員として生活の糧を得ながら、作家活動を続けたのである。吉江喬松は、こうした生い立ちのフィリップを次のように評している。

中央フランスの或る小村に、貧しい木靴工を父として、日雇ひ女を母として生れ出たシャルル・ルイ・フィリップは、前世紀のデカダン時代にその少年時を送り、その頽廃期を脱出し、また脱出せしむるやうに、新興の文藝を、藝術上の未開地から生い立ちしぬる役目をした正純な貧者の一人であつた。彼の周囲に、學究的な資本論が論ぜられ、宗教の復興が議せられ、問題文藝が幅をきかせてゐる中に、彼は自身が生まれるよりの貧しきものであり、終生貧しき者の友であり、そして常に貧者そのものの純正な単一な表現そのものとなつたのであつた。彼には民衆へ行く必要はなかつた。彼がその一人であつた。彼がソシアリストであるとしても、それは成つたものではなかつた⁹⁾。

「貧しい」「貧者」「貧しきもの」「貧しき者の友」「貧者そのもの」とこれだけの

文章の中にこれでもかというほど、「貧」の字が散見される。さすがに、フィリップも気を悪くするのではないかと思うほど、日本でのフィリップの紹介には常にこの言葉がついてまわることになる。一例を挙げると、1925年に出されたフィリップの *La Mère et l'enfant* すなわち『母と子』は、わざわざ『貧と母と子』（至上社、1925年）と意識されているほどだ。

だが、実際のところ、フィリップの家庭は、当時の日本人が想像するような、食うに困るというような状態にあったわけではない。確かにフィリップの祖母は、一人息子を抱えて寡婦になってしまったために、物乞いを余儀なくされたのであったが、その一人息子であるフィリップの父親は、木靴職人として生計を立て、妻とフィリップと双子の妹を不自由なく養っていた。もちろんブルジョワのような贅沢な生活ではなかったが、田舎の職人として世間一般の暮らしを営んでいたのである。フィリップ自身、公務員として安定したポストを得たあとは一人で暮らしていくのに不自由のない収入を得ていた。始終金欠を訴えてはいたが、それは自費出版のための借金があったためである。しかし、身近にいる友人たちが、アンドレ・ジッドやヴァレリー・ラルポーといった大金持ちの子息ばかり、という状況にあっては、みじめな思いを余儀なくされることも多かっただろう。フィリップの苦悩は、高等教育を受け知的水準を同じくしたところで、社会階級をよじ登ることはできないという圧倒的な不平等感であったと思われる。彼は、厳格なフランスの階級社会が、庶民に向けてうっすら開けた扉に滑り込んでしまったがために、その残酷さを痛いほど経験しなければならなかったのである。

たしかに、当時、フィリップほど階級差別を肌身に沁みて感じていた文学者はいなかったろう。その意識は当然のごとく、社会主義的な傾向を帯びる。社会主義政党や労働組合が大きな発展を遂げていく時代、駆け出しのフィリップが、社会主義雑誌『ランクロ』の仲間と共鳴し、作品を寄稿していくのも自然な成り行きであった。しかし、フィリップは自らを社会主義者として思想的な小説を書いたのではなかった。『ランクロ』が1899年に廃刊された後は、社会主義雑誌に寄稿することもなくなり、『エルミタージュ』や『ルヴュ・ブランシュ』といった有名文芸誌に寄稿できるような作家に育っていく。フィリップの言葉を見てみよう。

社会派小説？驚くべきことですよ。小説を社会的心理的研究の題材にしようだなんて。いいえ、必要なのは、生きた人間を生み出すことです。小説、それは単に理解するものではなく、とりわけ感じるものなのです¹⁰。

再び日本に目を向けると、フィリップが紹介された当時の日本では、近代産業の発展とともに問題化してきた労働条件の悲惨さや格差を受け、労働運動、社会主義

運動が盛んになっていた。そんな中、1921年に小牧近江が中心となり、反戦平和・人道主義的革新思想を基調とした同人雑誌『種蒔く人』が発行される。同雑誌は発刊処分を受けながら1923年まで続いたが、同年9月に発生した関東大震災によって、廃刊を余儀なくされた。こうした時代背景を考えると、フィリップを愛した人たちが皆、「貧しく、小さい」¹¹⁾ながら、孤軍奮闘した彼の姿を、懸命に社会に広めようとした意図が飲み込める。

吉江喬松は、農民文芸運動の提唱者であったし、小牧近江は、社会主義運動の急先鋒であった。彼らがフィリップを同志とみなし、友と呼ぶのはこうした問題意識を共有していたからにほかならない。彼らは決してフィリップを誤解していたわけでも、利用しようとしていたわけでもない。フィリップが声高に主義主張を訴える思想家ではなく、あるがままの事実を述べることによって、不平等な社会を映し出す民衆の一人であったという点に、唯一無二の価値を見出していたことは明らかだ。しかしながら、月報に「フランスにおける新進プロレタリア作家の一人」であるアンリ・ブーライユの勇ましい文章¹²⁾を載せ、常にフィリップを「民衆」「素朴」と紹介することは、読者にどのような印象を与えるものだったろうか。『明星』の放つ知的でハイセンスなフランスのイメージとはかけ離れた、泥臭い印象を植え付けるものではなかったか。とりわけ留意しなければいけないのは、「貧」という字がとかく「無学」を連想させることである。フィリップは「無学」どころか、当時最高の教育を受けたエリートであることを、当時の読者は認識していただろうか¹³⁾。フランスと日本では社会環境がまるで異なる。にもかかわらず、日本の生活水準に依拠した物差しで「貧しい」と称され、プロレタリア文学、社会主義文学のカテゴリーに押し込められてしまったフィリップが、豊かになっていく時代とともに、人々の興味を引くこともなくなっていくのは、必然であったと言えよう。

3. 「子」／鈴木三重吉

では次に、二つ目の流れとして、鈴木三重吉による『赤い鳥』の功績を見ていこう。ここでのキーワードとしては「子」という字を挙げておきたい。

前述したように、フィリップが日本に紹介されはじめたのは、1922～3年頃のことである。最初に翻訳されたのが、堀口大学訳による短編集であり、次に小牧近江訳の短編集『小さな町』が世に出た。日本人の感性に短編が合うとはよく言われることであるが、フィリップも、わずかな紙数のうちに完成された小宇宙を現出させる職人技によって、日本人の心をつかんだのであろう。

そうした土壌をふまえ、鈴木三重吉が『赤い鳥』に「うば車」を書いたのが、1931年4月。『赤い鳥』前期が1918年から1929年、再刊されたのが1931年1月号(1936

年10月号まで後期)なので、再刊後すぐということになる。その後、32年から35年までの間、フィリップの短編は計7篇掲載された。これは、『赤い鳥』に載せられた西洋の作家の中でも、際立って多い回数である。以下に挙げるのは、その掲載状況と再話者である。

- 1932年8月 「小さな弟」堀歌子〔4巻2号〕
 1932年11月 「火」平塚武二〔4巻5号〕
 1933年6月 「ずるやすみ」松江きみ子〔5巻6号〕
 1933年7月 「まり」松江きみ子〔6巻1号〕
 1934年11月 「乱暴もの」中村十四男〔8巻5号〕
 1935年2月 「子犬」井出八辰(鈴木三重吉の変名)〔9巻2号〕

ここで取り上げられた短編はいずれも、いわゆる翻訳ではなく、底本をアレンジして子供向けの童話に仕立て直した再話である。佐藤宗子は、「再話の倫理と論理—フィリップ短編の受容」において、次のように述べている。

『赤い鳥』においてフィリップものが掲載された時期は、復刊直後、三重吉が逐訳にとらわれていた頃から、より柔軟な訳をめざして変わりつつあった時期に相当する。そして、本章でみてきたフィリップものも、この流れを反映したものである。早い時期の「うば車」は、語や文の省略も少ない。もっともあとになってからの「子犬」は、本章はじめに引用したごとく、三重吉自身、かなり意識して、手入れをしている。これは、他のフランス文学作品にもみられる。(…)それでも、フィリップもの場合、筋自体を変えるようなことはしていないし、叙述も原文に沿ったものであった。これは、三重吉が、フィリップものを選ぶにあたり、「明るい、筋のあるもの、〈すっきりと、心理描写〉のあるもの」という基準をたてていたことと関係しよう。彼の再話の特徴—冒頭部での設定の明示、筋の単直線化、会話・心情表現の多用、結末部での付加—は、すべて、再話の基準に沿ったものである。つまり、とりあげたフィリップ作品は、三重吉の再話方針にかなうものであったが、それでも不十分と思える箇所を、方針にもとづいて手入れしたわけである。これは三重吉の再話のあり方として、注目すべき点であろう¹⁴⁾。

つまり、鈴木三重吉は、フィリップの短編の中でもとりわけ筋が「わかりやすい」ものを選出した上、さらに子どもが理解しやすいように工夫することで、本来子供向けに書かれたのではないフィリップの短編を、日本の子供たちのもとに届けたのである。

これを契機として、フィリップは日本において、「子供向け」のフランス人作家としての地位を獲得していく。そして、この流れは脈々と受け継がれていき、フィリップの長編が出版されなくなっていくのと反比例するように、55年から60年代に向けて勢いを得る。1955年に出版された『世界少年少女文学全集38』(『小さき町にて』淀野隆三訳、創元社)をはじめとし、次々と青少年向けの全集に所収され

ていくのである。

とはいえ、残念なことに、この勢いは長くは続かず、70年に入ると一気に終息する。そして、80年に入ると、フィリップの出版はばたきと見られなくなってしまうのである。

しかしながら近年、フィリップはじわじわと再評価の兆しを見せ始めている。2003年にみすず書房から出版された山田稔訳『小さな町で』¹⁵⁾の名訳が、その呼び水となったことは疑い得ない。また、堀江敏幸によるフィリップ紹介の影響も大きいだろう¹⁶⁾。大人向けのアンソロジーに所収されることも増えてきた。

かように、ここにつながるまで、フィリップの短編が細々とでも、読者の糸を紡ぎ続けてこられたのは、『赤い鳥』の再話によって、子供向けの「よくできた」話として広く知られたことが、少なからず影響していると考えられる。

おわりに

最後に、フランスにおけるフィリップの受容についても言及しておこう。フランスにおいて、フィリップは社会主義者たちに持ち上げられることも、子供向けの雑誌に取り上げられることもなかった。

フランスのみならず、ヨーロッパにおいて、シャルル＝ルイ・フィリップと言えば『ビュビュ・ド・モンパルナス』であり、娼婦や梅毒という言葉とともに想起されるベルエポック期の作家である。没後しばらくは、ジッドをはじめとする友人たちの記憶に新しく、死後出版も相次いだ。第一次世界大戦を経て、激動の時代が訪れる。あらゆる思想が渦巻く中で、もはや前世紀の遺物のように葬り去られてしまうのも致し方ないことだったろう。今では、フランスでも、日本と同様、フィリップという名を聞いて懐かしく目を細めるのは、一世代前の知識人ばかりとなってしまった。

だが、没後100年を機に、フィリップへの言及がインターネット上で多く見られるようになってきている。現に、Amazon.frでは、作品のみならず、フィリップについての評論やフィリップ研究会の会誌に至るまで入手することができる。これもひとえに、1936年以降毎年会誌を発行し、途切れることなく、調査や講演会、インターネットの整備などの活動を続けている「フィリップ研究会」*Les Amis de Charles-Louis Philippe*の情熱によるものだろう。

以上、日本におけるフィリップの受容に関し、二つの流れを指摘してきた。一つは、フィリップを友と慕い、紹介に努めた初期翻訳者たちの潮流である。彼らにとってフィリップという作家は、生まれながらの社会主義者であり、自分たちのロール

モデルのような存在であった。けれども、いつまでも「貧しい」「小さい」「民衆の一人」と紹介され続けるフィリップが時代にそぐわなくなり、どんどん読まれなくなっていくことを想定していなかった。フィリップを最も愛した人たちが、はからずもフィリップの読者を奪ってしまうという、なんとも皮肉な受容を招いてしまったと考えられる。

二つ目は、『赤い鳥』がその道筋をつくった、子供向け読み物という潮流である。

「子供にも読める、よくできた短編作家」という評価が定着したことで、フィリップは出版社側にとって、言ってみれば「便利な」作家になったと言えるのではないだろうか。子供向け、青少年向けにも、そして次第に大人向けのアンソロジーにも「ちょうどよい」読み物という立ち位置を得たことで、フィリップの名は消えずに残ったと考えられるのである。

とはいえ、結局のところ、どちらも正当な評価とは言い難い。一人の作家を理解するには、全体像を見なくてはならないことは言うまでもない。フィリップを愛した文人たちがその真価を見定めていたように、高い芸術性、普遍性を有する作家として、これからもっとフィリップが読まれても良いのではないかと思う。フィリップは、『ビュビュ・ド・モンパルナス』だけの作家でも、短編作家でもない。『ペルドリ翁さん』『マリー・ドナディユ』『クロキニョル』など、現代の日本人が共感しうる心情が描かれた作品がたくさんある。社会主義的でも子供向けでもないフィリップの作品群には、ユーモアとペーソスを湛えた豊穡な世界が広がっている。

注

(旧字体の部分は、読みやすさを考え、引用者が新字体に改めたことをお断りしておく。)

- 1) 山内義雄、「クローデルと早稲田」『遠くにありて』、毎日新聞社、1975年、pp. 104-105. cf. Paul CLAUDEL, *Charles-Louis PHILIPPE, Œuvres en prose*, Gallimard, 1965, pp. 539-541.
- 2) 山田登世子、『「フランスかぶれ」の誕生—「明星」の時代 1900—1927』、藤原書店、2015年。
- 3) « Philippe certainly disturbs any lingering complacency that we may feel toward the world as it is; but he has no cure to advocate. He is both compassionate and dispassionate; in his book we blame no one, we blame not even a “social system” ; and even the most virtuous, in reading it, may feel: I have sinned exceedingly in thought, word and deed. » T. S. Eliot, *Preface for Bubú of Montparnasse*, Berkeley, 1957, p. 9.
- 4) 宮本百合子、「日記」『宮本百合子全集 24 巻』、新日本出版社、1980年、p. 103.
- 5) 井上靖、「私の自己形成史」『井上靖全集 第23巻』、新潮社、1997年、pp. 42-43.
- 6) cf. 「私の自己形成史」のほか、「青春放浪」、「中学時代の友」。
- 7) 太宰治、「碧眼托鉢—フィリップの骨格に就いて」『太宰治全集第10巻』、筑摩書房、1967年、p. 51.
- 8) « …je crois être en France le premier d’une race de pauvres qui soit allé dans les lettres. » Charles-Louis PHILIPPE, *Lettre à M. Barrès*, 11 nov. 1903, *Œuvres complètes Tome I* éditées par David Roe, Moulin, Ipomée, 1986, p. 27.
- 9) 吉江喬松、「大地の聲 シャルル・ルイ・フィリップ」『仏蘭西文藝印象記』、新潮社、1923年、p. 222.

- 10) « Le roman à thèse? Je trouve extraordinaire, qu'on en soit venu à faire du roman un prétexte d'études sociales ou psychologiques. Non, ce qu'il faut, c'est créer des personnages vivants. Le roman, ce n'est pas seulement comprendre, c'est surtout sentir. » Charles-Louis PHILIPPE à l'interview avec Chardonnel et Vellay du *Gil Blas*, *op. cit.*
- 11) クローデルがフィリップに追悼の意を表し詠った詩 (Paul CLAUDEL, XXX. in *Numéro consacré à Charles-Louis Philippe, La Nouvelle Revue française*, n° 14, 1910, p. 139-140.) は、山内義雄によって訳され、「フィリップ記念講演会」において、帝劇の女優鈴木福子によって朗読された。その一節にある「貧しく、小さい、ひとり身の、フィリップは死んだ。」という言葉が、その後の日本におけるフィリップ紹介の語彙を決定づけたとも考えられる。cf. ボオル・クロオデル、「シャルル＝ルイ・フィリップ」山内義雄訳、『フィリップ全集 月報第一号』、新潮社、1929年、p. 2.
- 12) 「任務は一切をとりもどす事にある。—シャルル＝ルイ・フィリップの富は否定されている。これは一時的の、だが恐るべき日蝕である。鋭い、批判の文学に対して一つの反動があらわれている。我々のものを之に対抗せしむべき時である。我々の側のものであるものを示し、知らしめ、第一位に読ましむべき時である。(…) かくも、単純に偉大であり、かつ、ほこらかなる彼の驚異すべきをしへに聴こう。(原文ママ) 彼の中に入れて行こう。そこには、一切の取るべきものがある。シャルル＝ルイ・フィリップをたかくかかげよう。」アンリ・ブーライユ、「シャルル＝ルイ・フィリップ」冬木道夫訳、『フィリップ全集 月報第三号』、新潮社、1930年、p. 1.
- 13) 石川淳は、「フィリップ記念講演会」に先駆けて以下の文章を発表しているが、彼自身すでにフィリップを無学の者と誤解していたと思われる。「青春の手紙」の主人公は、二十歳と三十歳との中間に在る一即ち、わたくしと同年輩の一青年である。「野蛮人出でよ」との彼の叫びは、わたくしの心弦にも響応しないでは居ない。しかし、わたくしが、彼と共に叫ぶ為には、彼と同じ立場に身を置かなければならない。其の彼と云うのは、額に汗して麵麩を得る、ブルジョワ教育の汚辱に染まない、生のままの「野蛮人」である。運命的に現代の学校教育を受けさせられた私一人と同じ身上の「われわれ」—は、ブルジョワ文化から引き続いだ(原文ママ)「智識」を背負って居る。「野蛮人」となる為には、第一に、フィリップに従って、其の「智識」の殻を振り落さなければならぬ。」石川淳、「シャルル＝ルイ・フィリップの一語」、『石川淳全集 第12巻』、筑摩書房、1990年、p. 16.
- これに対して、佐藤春夫は、フィリップを以下のように正当に評価しているが、他の作家において、こうした言及が見られることは残念ながらほとんどない。「だが、フィリップにあつては、われわれは自分の肉親を愛するごとく彼を愛しながら、尊敬を忘れることができない。その芸術に驚嘆しながらも、兄弟！と呼ぶことを忘れるわけには行かない。かの一見素朴で無学に見えるこの作家の文字と文字との間には、バルザックを生み、モウパッサンを育てた仏蘭西文学の揺らぎない伝統が脈をうっている。これを除外して、単に素朴であるだけであったなら彼に対する尊敬は出て来ないだろう。」佐藤春夫、「フィリップに就いて」『フィリップ全集 月報第二号』、新潮社、1930年、p. 1.
- 14) 佐藤宗子、「再話の倫理と論理—フィリップ短編の受容」『日本児童文学』、1981年、pp. 55-56.
- 15) シャルル＝ルイ・フィリップ、「小さな町で」、山田稔訳、みすず書房、2003年。
- 16) 堀江敏幸、「シャルル＝ルイ・フィリップ「小さな町にて」」「シャルル＝ルイ・フィリップ「小さな町にて」(2)」(「傍らにいた人②②」)、日本経済新聞、2017年7月15日、22日。